

〈研究ノート〉

象るコトバ、触れるココロ

——島根県出雲市の天神人形を事例に——

内 藤 浩 誉

一

民俗学は「旅の学問」とも称される。筆者自身もかれこれ三十年のフィールド調査歴を持つが、旅に出た際には決めている事がある。「その土地の物を見る・買う・食べる」である。当初は物珍しさからのこだわりのあったが、機会を重ねるごとに、この三点は五感を刺激しながらその地域の特徴や特異性を捉えるにあ

たり多くの視点を与えてくれることにも気がついた。その土地で育まれた文物には、歴史や風土のみならず人々の感性も反映されているからだ。

そうして増えたコレクションが、郷土玩具である。その一つ一つを眺めてみると、同じ名称でも地域によって製作技術や材質、表情や形状、大きさや模様・色彩、目的などが異なり、その背景に控える人々の生

活での営みやそれを支える心情があることが伝わってくる。翻って学問史を振り返ってみると、有形文化に籠められた伝承に着目したのが渋沢敬三（一八九六—一九六三）である。手作りのぬくもりが唯一無二の個性となり愛おしさが増すと、様々な人形・玩具がコレクションの対象となったが、彼とその仲間たちの蒐集物「屋根裏部屋の博物館（アチック・ミュージアム）」は、民具研究の発展に寄与した。いわば、郷土玩具が日本民俗学における有形文化研究の礎となった点は、庶民生活や地域研究における多岐に渡る分野との協働や文化財保護の観点でも評価されている。単なる愛玩趣味に留まらず、それぞれの特徴の違いを学問対象として見出した意義は、決して小さくないのである。

「物に魂が宿る」という考えは、日本文化に表出する一つの思想として肯定され、多種多様に発展した人形世界を支えている。単なる物質として見るだけでなく、「モノ」に透かし見える人々の儀礼や信仰、生活文化を捉えようとする方法は、民俗学として深みを与えるのみならず、学問を超えた醍醐味を与え、人々を魅了する。

今回取り上げる「土天神」は、各地で見られる日本郷土玩具の代表の一つであるが、伝説や行事と顕著に結びつく点が興味深い。出雲地方の事例を通じ、「モノ」に表出する数々の事象や語られる歴史と意義に触れてみたい。

二

日本の郷土玩具が地域と密着しながら独自かつ多種多様に育まれた点は、持ち味の一つである。近代以前の作品を見る時、しばしば取られる分類方法が材料に基づくものである。木材（こけしやキジ車）、紙（張り子や姉様人形）と並び、土を用いる「土人形」は粘土を焼成するため、一般的に焼き物や瓦産業の盛んな土地で根づいたと説かれる。伝説人物や芸能演目の登場人物を象る品が見られる中、人気の一つが「土天神」と呼ばれる天神人形だ^{註1}【写真A】。

「天神」とは、雷や雨水を司る天の神、転じて農耕神を示す。天神を祀る神社や信仰でよく目にする「撫で牛」は、牛が農耕に不可欠で身近な動物ゆえに伝承に組み込まれる。一方で、天神といえば平安時代の貴



A：伏見土人形「牛乗り天神」【京都府京都市】

族・菅原道真（八四五～九〇三）を指すことも馴染み深い。道真は学問や文武に秀で、学者のみならず政治家としても天皇の信任厚く、右大臣にまで出世する。にも拘らず、左大臣藤原時平の讒言により大宰府（福岡県）へ左遷され、落胆のうちに亡くなった。多くの人が道真に心を寄せるのも、この悲劇性によるところ

が大きい。

筑紫へ流される際の「東風吹かば にはひをこせよ 梅の花 主なしとて春を忘るな」（『拾遺和歌集』雑春）は、彼の人生を語る際に度々引き合いに出される歌であるが、これが民間伝承になると「飛梅伝説」として派生する。遠方地への移動で、家屋や樹木を伴うことは叶わない。泣く泣く別れを告げるために語りかけた道真の哀切に応えるごとく、愛でられた梅は道真を追慕して飛んでいった―そう語る人々の深く温かい同情心と豊かな発想力に、聞く側もまた心を揺さぶられてきたからこそ、語り継がれる物語になったのである。

菅原道真への最真心の表れであろう、政敵が雷に打たれた事実はやがて彼を雷神＝天神と見なす想像的地を生じさせ、実像を離れた伝承（虚像）が形成される。それらは飛躍的な表現と新たな物語を描き出し、「貴種流離譚」の典型的な型として語られ、各地では伝説が流布された。さらに人々の心情と生活に沿った信仰が生み出され、文化形成に多大な影響を与えてきたことは、日本文化を俯瞰すれば多くの事例に行き当たる。道真への畏怖から生まれた菅公怨霊説話は御霊信仰と

結びつき、道真を全国各地の天満宮の祭神として祀る一方、江戸時代になると寺子屋を中心に学問の神として篤く信仰を集めた。そこで子供を取り巻く民俗事象として挙げられるのが、節句で用いられる天神人形である。

一般的には女兒の行事として受け止められる雛祭りだが、殊に山陰・山陽の中国地方で顕著なのが、男児のためにもこの日に天神人形を飾る事例である。残念なことには現在廃絶したり希薄化の傾向にあるが、それでも遺された人形からはかつての記憶が甦り、子供への健やかな成長を願う普遍的な祈りに立ち帰らせる。人々の身代り（形代）として災厄を担うという人形に対する捉え方は、単なる遊びや鑑賞の対象に留まらない存在であることを示しており、祈願や行事の根底にある「災厄を遠のかせ幸福を近づける知恵や工夫」として、現代にも深い思いを投げかける。そこに天神が登場する意味に注目すると、さらに人々が長年積み重ねてきた自然観や生命観が反映されていることも見て取れる。それは同時に、伝承が内包する人間の本質を捉える有意義性にもつながるのである。

三

天神を菅原道真公として祀る天満宮^{註2}は、全国で一万余二千社あると言われる。島根県の出雲市・松江市・雲南市一帯でも複数見られ、中でも旧来待村（現松江市六道町上来待）菅原地区では、次のような道真生誕地伝説が語られている。

§ 『島根県口碑伝説集』^{註3}【島根県八束郡】

菅原天神の縁記

菅公の父君菅原是善卿が出雲の国司で居られた時、各地方を巡視して暫く来待村の狩野家に滞在せられたこの家の一女春才姫を愛せられて姫は妊娠の身となった。卿は任満ちて帰京せらるゝ時、「生れた子が男の子であつたら京都の醍醐の花園に捨て置くべし」と仰せられた。姫は男子を生んで三歳まで育て、約束の如く京にのぼつて花園に置いて帰国した。けれども我子のことの忘れ難く公が幼時玩具として梅の核に穴を穿つて紐を通して置かれたものをせめての思ひ出に地に植え「我志通じなば芽を出せよ」と念じたが、不思議や植えた核から芽を生じず



B：菅原天満宮【島根県松江市】



C：菅原天満宮境内の野見宿彌の墓

ンく成育して実を結ぶやうになった。其核には不思議にも穴があった。後年菅公は筑紫に左遷の時、姿をやつして出雲に入り、生母を訪れた。離別に際して梅の木で自像を刻し、また自画像を添へて形見に残し置かれた。木像は御神体となり、自画像は実物となり、鼻竊梅は御神木となつて今日まで祀られて居る。また附近に生湯の井戸と称する処があつて

共に靈域として参詣するものが多い。
当地の「菅原天満宮」も、全国で見られるのと同様に留まらず遠方からも入学試験や資格試験に際して受験生が合格祈願を願ひ、あるいは御礼参りに訪れてゐる様子が、鈴なりの絵馬から窺える【写真B】。
一方他地域と異なるのが、境内に存在する野見宿彌

の墓である【写真C】。当地での道真は、埴輪起源伝承が付随する野見宿彌の子孫として語られているからである。かつて尋常小学校の教材だった島根県の郷土史『簸川読本』^{注4}では、野見宿彌は郷土の偉人かつ菅原道真の祖として紹介されている。また地元の口コミでは、道真の父が出雲国在任中、祖先である野見宿彌の墓参を望んだ折に案内をしたのが在地の娘であった、との馴れ初めが語られている。人物の偉大さを示すためにその出自を説く話はしばしば見られるが、その際に注目されるのが母の存在である。この出雲地方での道真伝承も例外ではない。菅原天満宮の斜向かいには、近代になり道真公生誕地と伝わる場所に建立された「梅の木天神」が存在し、境内には道真の母春才姫を祀る産湯池もあり、安産祈願の信仰を集めたという【写真D】。

また道真が馴染んだ「鼻繰梅」は、菅原天満宮や梅の木天神の境内で今でも花を咲かせ実を成らせる。種を見せていただいたが【写真E】、実際に穴のような窪みがある珍しい形状で、なるほど伝説を支える根拠となっていることが窺える。すなわち、牛と天神との



D：梅の木天神境内の産湯池



E：穴が開いている鼻繰梅の種

関連性を基底としながら、「牛の鼻輪を通す」と見立てるという独特な想像力を發揮しているのである。

さらに梅の木天神境内には、「身代わり天神」と名づけられた黒衣の道真公が祀られている。伺った話では、先代の宮司が昭和六三年に建立したところ初孫が生まれたため、ご利益があるということで安産子宝の祈願として信仰されるようになったという。また道真は観音を篤く信仰したということで、神徳発揚のため平成七年には「菅原観音」という大きな観音像を造立した。口伝が信心に結びつき新たな造形を生んでいる様子は、固定化されることなく絶えず更新して継承されながら今の人々と密接な関与を続け、現代でも信仰が生きていることの表れと捉えられる。史実では非業の死を遂げた道真であったが、伝承化されることによって「今」を生きていることが読み取れよう。

四

子供と関わる信仰の一端である節句には、日本の贈答文化も表れる。新しい命の誕生を祝い、初節句には人形を贈り健やかな成長を祈願する。上巳（桃）の節

句（三月三日）は年中行事であり人生儀礼といえるが、出雲地方では月遅れの四月三日に、女兒は男雛・女雛を飾り、男児も社殿に収められた天神人形を飾ったという。四月末に片付けると、男児は端午の節句でも土天神と鯉幟を五月末頃まで飾った。現在では行っていない。昭和三十年代、派手になることを諫める生活改善運動が起こると、鯉幟を立てることを止めたという。四十年代に入り経済的に上向くと自然と復活したが、近年では少子化や住宅事情の影響で鯉幟を立てる場所や機会が減ったとのことである。

天神人形といえは多くは黒衣を纏うが、中には赤衣を着た天神があり、江戸時代より疱瘡除け（魔除け）として重宝された。出雲地方が特徴的なのは、白衣な故「白天神」と呼ばれる点である。出雲地方では、長男は座った白天神を、次男以下は立天神が贈られたそう、米一俵の値段に相当した時代もあったという。そして元服に当たる十一〜十八歳になると、無事に成長したお礼参りの際、誕生時に贈られ男児の身代りになつてくれた天神人形を氏神に奉納したとのことである。



F：出雲地方の白天神〔梅の木天神〕

先述の梅の木天神に参拝した折、拝殿に白天神が安置されている様子を目にした【写真F】。気になったので伺うと、次のような説明だった。戦前まで男の子も桃の節句で人形を飾っていたし、泥天神（中国地方では土天神を指す）を専門で作るデコ屋は町に複数存在したが、今はなくなってしまった。かつては天神講として毎年地域の十軒ほどが集まり参拝していたが、今は個々で来る人もいる。郷土の文化として宮で保管している白天神を飾っているが、これを見て思い出話

のきっかけになることもあるという。行事自体は変化し今は途絶えてしまったとしても、懐かしさから回顧話の種として人形がコミュニケーションの仲介役を果たしていると分かるお話だった。

さて、出雲市斐川町出西地区では現在、「出雲五色天神」【写真G】という新たな土天神を製作販売している。ここでもかつて、子供の健やかな成長を祈った贈り物として、あるいは天満宮参拝にて授与される天神人形が存在していたが、いつしか廃れてしまった。しかし昭和四十六年、旧家から江戸時代の人形型が見つかった。これを契機に「出西でこや連」が江戸期に盛んに製作された天神人形復活に向けて動き出したのだが、この復興には地元・出西窯の協力なくしては実現できなかった。人形の素地は、この窯で焼成したものだからである。最初は、出西窯の主婦たちが内職として作っていたが、平成十年前後に途絶えた。最後は一人で製作を担っていたが、完成させるには労力がかかる割に、生活を支えるだけの収入につながらないことが理由にある。しかしそれも令和元年、天神人形を再興させることで地域貢献を目指す島根県退職公務員連



G：出西地区の出雲五色天神【島根県出雲市】



H：お話を伺った斐川でこや連のみなさん〈2025・03・18〉

盟斐川支部（「斐川でこや連」【写真H】）が再び復活させることにした。

天神人形は、古くは天満宮に参拝した折に授与される二色対のものもあったそうだが、現代になって一度廃絶したものの復活に当たり創作を織り交ぜたという。それが緑・赤・白・青・黒で一組の五色天神である。人への思いやりの心を思い起こさせるため、儒教の「信・智・礼・義・仁」になぞらせたという。十月初頭～三月末の冬季、週三日間の分担作業で製作し、十二月から一月に販売する。工程は、①粘土をこね、丸い塊にする。②粘土を石膏の型に数分間嵌め、象る。③型から取り出し【写真I】、一・二日乾燥後、篋で縁を取り滑らかに形を整え磨く。④一か月間、自然乾燥させる。⑤出西窯で一日八時間、八百度の高温で素焼き。⑥ジェッソ（白塗料）で下塗り後、半日から一日乾燥。⑦ボスターカラーで色を塗り乾燥、という手順を繰り返す。この時、細筆で模様や顔を塗る工程を十日から二週間かけて行う。⑧ニス塗り、艶消しのスプレーを施し乾燥させたら完成である。人形を通じ、地域に目を向けてほしいという願いを込めながら、令



I：天神の型から取り出した粘土

和七年現在、十九名が工房で従事している。

かつては男児の贈り物であった天神人形は、現在では性別問わず誕生祝いとして求められ、次世代に継承すべく色塗りのワークシヨップを行うなど、子供たちの身近な存在として息づいている。

五

「出雲五色天神」について調べてみると、協力した出西窯の歴史もまた、時代や世相を反映したものであった。戦後、農地改革によって農業がでなくなつた農家の次男・三男たち五人が、村に根づいた新しい産業を興すことに乗り出した。色々と試行錯誤する中で島根県内には歴史ある窯元がいくつもある点に注目、地元でふさわしい陶土を見つけ構えたのが「出西窯」であった。自分たちの道を歩むべく新しい文化の創出奮闘する支えには、当時の民芸運動の影響も大きい。河井寛次郎、柳宗悦、濱田庄司、バーナード・リーチなどの文化人たちと交流、時には指導を受けながら、民芸の考え方や姿勢を学び、作品作りに向き合った。村から採った窯名にも、土地と共にあろうという民芸

の心に通じる焼きものを目指したからだという。そして、焼きものを作る動機となつたのが、終戦間際、斐川町に造営された海軍大社航空基地（別称・新川飛行場）の残土を活用することを思いついたことだった。実際試作してみると不向きだと分かり別の場所から採取した土を利用することにしたが、飛行場の存在が新たな文化創生の背景にあるとは、まさに歴史は然り合わせた縄の如く繋がっていくのである。

さらに、この飛行場の来歴を遡ってみると、斐伊川から分水し斐川町界隈を流れていた新川に至る。斐伊川は氾濫が多発する暴れ川で、その流域は度重なる洪水への対策として、江戸時代前期から用水の開発が行われた。特に文政九年（一八二六）の大洪水は壊滅的被害を与え、治水として新川を開削、付近の農民は耕作地を移転させられたり、労役に動員された。昭和初期まで宍道湖に注いで放水路の役割を担っていたのが新川であったが、幕末期から斐伊川の河床が悪化する。たたら製鉄を行っていた斐伊川上流では原料となる砂鉄採取をしていたので大量の土砂が流出、その堆積で周辺部より川底が高くなる天井川になり、堰が埋め尽

くされたため、大正期には斐伊川本流の改修と新川の閉鎖（廃川）が決まり、工事が昭和初期まで行われることとなった。そして太平洋戦争末期に密かに造営されたのが大社基地で、軍人が徴用され川の痕に突貫工事で滑走路が建設された。米軍に特定されないよう大社基地と呼ばれていたが、終戦直前の昭和二十年七月二八日には山陰地方も斐川町の新川周辺から鳥取県大山口にかけて空襲被害を受けており、存在が知られていなかったとは思えないと考えられている。

「斐川でこや連」の青木誠氏と黒田邦宏氏が、空襲のあった日の記憶を話してくださいました。共に昭和十三年生まれ、当時小学校に上がったばかりの一年生だった。昼食を摂った後、日課のように遊んでいた斐伊川の河原で突然現れたB 29の機銃掃射に遭う。幸い、すぐに中洲の茂みに逃れたので無事だった。当時死者はいないと聞かされていたが、この空襲によって斐川周辺でも犠牲者が出ていたことを戦後になって知る。今も新川に掛かっていた鉄橋には銃撃を受けた際の弾痕が確認でき、日常で使用する何気ない道路にも戦跡は残されている一方で、気に留めようとしなければ知る



J：一部保存された海軍大社航空基地の滑走路（遺構）

よしもない戦争の記憶を痛感する。

大社基地は、一部保存されている箇所を除き現在は住宅地化した光景【写真】が広がり、太平洋戦争末期の地域史を窺う面影は無いに等しい。戦争遺跡として現地保存を願う動きはあるものの、実際に光景を覚えていた話者の言葉を受け取る聞き手が、どれほど脳内再生できるだろう。多くは想像するに乏しいのではなからうか。それだけ一変した地域の光景からは、擁する歴史を思い起こすことは難しい時代になっているといえる。ならばこそ、語りが持つ再現力が発揮されることに期待したい。聞く耳を養い、思いを汲み取っていかねば、身近な歴史も遠のくだけであろう。

終戦前後の思い出も併せて聞いた。大社基地があったため、国民学校は兵宿舎になったこと。堤防に立ち並び飛び立つ機影を憧れの眼差しで見送ったこと。自宅に兵隊さんが宿泊していて、縁側で一緒に聴いた玉音放送はザアザアと雑音だったこと。教科書代わりに渡された新聞紙のような印刷を自分たちで冊子として折ったこと。昭和十九・二十年に禁止された野球を二三、四年頃に自由にできるようになった時には終戦を

実感したこと、などなど。

戦後八十年を迎えた今年（令和七年）、経験談として話を伺う機会の減少と体験風化への危惧が益々高まり、意識的意欲的に未来に向けた歴史の継承と教訓を肝に銘じることが強調されている。まずは、身近な経験が積み上げられた地域史に目を向けることから始めてみる大切なのではないか。小さなきっかけが広い展望への近道となるかもしれない。

六

身の回りのあらゆる文化事象は「目に映じる生活外形（有形文化）、耳に聞こえる生活解説（言語芸術）、心意感覚に訴える生活意識（心意現象）」の三つに分できると述べたのは柳田國男であるが、これらは互いが独立している鼎立関係のみならず、相互に手を結ぶ三位一体の関係でもある。伝説は事物を伴う点が一つの特徴であるが、筆者は長年伝説研究に携わり数々の現場で多くの事物に接する中で、事物に感情を乗せ二つの「そうぞう（想像・創造）」に依って語っている人々の思いにも触れてきた。物を通じて人々の心情

を理解できるという体験は、あたかも「物が語る」とでもあった。すなわち、人々が物に語らせ、あるいは物が人々に語らせると感じさせるのである。単なる置物として見ていては気づかない、物について言葉で説明し、そこには心を窺う―透かし見える信仰がある。同時に、思いを込めて作られた物から窺う地域史があることにも目を向けさせられた。物の歴史を語る中で地域を眺め、人々が歩んできた歴史とその心情や感性、生活の営みを知り、寄せる思いや託された祈りを伺うことへとつながった。

今回の出雲地方の伝説・信仰と有形物の関わりを辿る中で、一つの地域の歴史と背景への理解は、戦争体験にまで及んだ。治水事業の変遷の延長上に新しい文化産業が創出され、さらに人形作りにまで発展した過程は興味深い。伝統と革新、文化の廃絶・断絶と新たな復興・復活は地続きであるし、それを支えるヒントを過去から得て継承する様子、さらに魂を込めながらの物作りを通じて先人に思いを馳せ、次世代の幸福や未来への想いが窺えた。それは、生命に対する祈りと営みでもある。

伝説という言葉で彩どられた心象風景は、生活や経験の実相と深く結びつく。そこに息づく様々な事象を捉えるたび、私は高山樗牛の言葉「己の立てるところを深く掘れ。そこには必ず泉あらん」を思い起こす。人間を、己自身を理解すること。それこそが、人との出会いと触れ合いから足元を見つめる民俗学という学問の真髄であり、伝承を学ぶ醍醐味ではあるまいか。

〔注〕

1 伏見人形は、京都伏見稲荷大社のお膝元で製作された土人形の代表で、全国土人形の系統の源流とも言われる。農耕の神として崇拜した霊峰稲荷山の土を用し五穀豊穡を祈り製作したのが土人形の発祥。牛天神も典型的な造形である。

2 一般的に道真公を祀る場合は天満宮と呼称される。なお、天神社は必ずしも菅原道真公が祭神とは限らず、農神を祀るものも含む。

3 島根県教育会編 歴史図書社刊 一九七九（一九二七刊の再刊）

4 廿二 野見宿禰

我が國の國技といはれてゐる相撲の先祖であり、又、土偶を以て殉死に代へようとの議を奉つて、後世幾十萬の人命を救はれたあの野見宿禰は、實に我が出雲國造家から出られた偉人である。(中略)我が國では、太古から、身分の高いお方がお亡くなりになると、そのお召使になつた家来や馬などが、お墓の周に生埋めになつて、殉死するといふ風があつた。これは、大變あはれな事なので、天皇は、何とかしてこれを改めたいとお考になつてゐたが、たゞく皇后がおかくれになつたので、宿禰が奉つた議をお用になり、「朕が意に適つて居る。」と大そうお喜びなされ、出雲からたくさんの土部を召して、土偶をお作らせになつた。後世になつて、古墳から掘り出される埴輪がそれである。天皇は、宿禰の功を賞して、又土地などを與へ、土部の頭としました。

其の後、宿禰は、都と出雲との間を往来して居られたが、途中で病にかゝつて、亡くなられ、お墓は播磨の龍野にあつて常に参詣者が絶えないといふ。

宿禰の子孫には、立派な人が多い。中にも菅原道眞・大江匡房等は最も有名な方である。

【参考文献】

- ・『ひのかりたま簸川読本』(『修正簸川読本 上巻』尋常科第五學年用 島根縣簸川郡教育會署 昭和九年 武永明文舎刊)
- ・『図説 大正昭和くらしの博物誌 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』近藤雅樹編 河出書房新社 二〇〇一
- ・『渋沢敬三とアチック・ミュージアム―知の共鳴が創り上げた人文学の理想郷』加藤幸治 勉誠出版 二〇二〇
-
- ・『出西窯と民藝の師たち 民藝を志す共同体として』多々納弘光 青幻舎 二〇二三
- ・『出西ふるさと読本』出西ふるさと読本編集委員会編・刊 二〇二三
- ・『川の中の飛行場 汗と涙の青春―新川基地』榎原吉則・足立正編著 一九九八
- ・『いま甦る山陰海軍航空隊「大社基地」陰山慶一 島根日日新聞社刊 一九九六